

いた。私たちは、旧支局が区内にあるとの理由で中に入った。まだ店は閉じたままだが、多くの住民が行き交い、娘たちの笑い合う姿があり、子供たちが戯れていた。生活が生き残り、平和が息を吹き返していたのだ。私は戦争で荒れた心が和むのを覚えた。そして、ふと、東京では暮れの仕度で忙しいのではないかと思った。

夜、中島師団長から呼びだしがかかる。行政院に近い中央飯店だった。各社の記者二十名が集まる。私たちが食卓を囲んだのは、家具調度とも豪華な部屋だった。料理は、さすが材料が揃わず一級とはいえなかったが、酒は豊富だった。「今夜は入城祝いだ。大いにやろう」と、中島師団長は老酒の杯を高くあげた。そして滔々とぶつ。

「日本は風呂敷を広げすぎた。これ以上広げてはいけない。今後は杭州、広東などの関門を押さえ、占領地域に独立政権を樹てる。部隊は早く凱旋させて、国費のかさむのを防がねばならない。蔣介石がドイツに泣きついたという話があるが、事実だろう。日本が手を引くべき絶好の時機であることを蔣は知っているからだ。しかし、日本はうかつにドイツの仲介を受け入れてはいけない。ドイツは英国より恐るべき国で、条約など平気で破る。休戦条約は直接蔣と結ぶべきだ。もし戦後工作を失敗したら自分は黙っていない。大砲を持って、どこへでも乗り込んでいく」

戦後に来るものは三国干渉ではないか、と師団長はいう。戦勝の武将の当たるべからざる気焰だった。私は、政府がどのように出先軍団を統御できるのか、不安に思った。